

真名本『曾我物語』覚書

——〈御霊〉と〈罪業〉をめぐる——

小林 美 和

はじめに

曾我兄弟の仇討ちの物語の発生を、日本人の精神史の基層から解明しようとする試みは、柳田国男氏と折口信夫氏⁽¹⁾の論考に始まったといつてよい。そして、この両氏の論は、今日までの曾我物語研究の方向性を大きく決定づけてきたともいえる。それは物語発生の契機を、古来からの日本人固有の精神構造の特質から説き明かそうとした点において、際立った独自性を示し得た。

たとえば、柳田氏は、全国に散在する虎が石や曾我兄弟の墳墓の存在に着目し、そこに兄弟の御霊にかしづいた女性宗教家の活動を想定し、折口氏は、その根底に「若くして冤屈の最期を遂げた靈気懺悔念仏の意味」を読み取って、「盲巫覡の幻想の口頭に」発する物語であるとした。この両氏の方法を襲う研究は、以後、筑土鈴寛⁽³⁾、角川源義⁽⁴⁾、塚崎進⁽⁵⁾、大島建彦⁽⁶⁾、福田晃氏⁽⁷⁾等によって担われ、主として説話伝承論的側面において、具体的展開をみている。

本稿は、これらに具体的な成果を追加するという趣旨のものではな

いが、現存諸本中、最古態を示す真名本『曾我物語』を素材として、いく分手垢の付いた感のある〈御霊の物語〉という側面についてあらためて私見を差し挟んでみたい。

一 御霊の物語

遺念余執というものが、死後に於てもなほ想像せられ、従って屢々タタリと称する方式を以て、怒や喜の強い情を表示し得た人が、このあらたかな神として祀られることになる⁽⁸⁾。

これは、柳田氏の各種論稿において繰り返し登場するモチーフである。受苦の深刻さ、陰惨さからくる激しい怨念故に、人神として祀られる運命が多々存在したということである。

我れ瞋恚の身と成りたり。その瞋恚の焰天に満ちたり。諸の雷神・鬼神は皆我が従類と成て、惣じて十万五千に成たり。只我が行ふ所の事は、世界の災難の事なり。

これは、『天満宮託宣記』が記す菅原道真の靈託の一部である⁽⁹⁾。これによれば、天曆元年（九四七）三月、近江比良宮において禰宜の子、

太郎丸七歳の口頭を介してこの託宣はなされた。そして、これに先立つ、天慶五年（九四二）、京都右京七条に住居する多治比奇子という「一賤女」にも菅公の霊は下っており、自らを北野右近馬場に祀ることを要求している。⁰⁰さらに、沙門道賢がその神秘体験のなかで、日本太政威徳天となった菅公に遭遇したのは、その前年のことであった。⁰¹折から、時代は、将門・純友の乱をはじめとする兵乱、疫癘等、天地異変が続発しており、菅公の託宣は、これらの原因が、右に引用したような菅公の激しい憤怒にあることを物語っている。菅公の憤怒がいかに凄まじい破壊力を発揮したか、それは、たとえば北野天満宮所蔵の『北野天神縁起』が発散する圧倒的な迫力を目のあたりにするだけで事足りるであろう。

こうした巫女・尸童の口を借りた死者霊の活躍、御霊会における民衆のエネルギーの昂揚について、堀一郎氏は、次のような条件を指摘している。すなわち、その霊の怨恨が、民衆に同情、納得されるものであること、そして、抑圧する権力の横暴に対して民衆の攻撃性のはけ口を提供するに足るものという二点である。「生前と死時の異常性、非常民性」がその御霊の発現を促し、御霊は「定住農耕社会を常に対岸において、これを外から脅威して来る」という。⁰³

目を真名本『曾我物語』に転じてみよう。実は、真名本において、兄弟の死後の憤怒及び祟りが物語の主要なモチーフとして、語られることはない。その祟りが明確に示されるのは、五郎をわざわざ鈍刀で昇き首にして、本国への帰途、「五郎が祟りとして、夜な夜な悩み」、帰国後七日にして「狂ひ死」したという筑紫の仲太の一件ぐらいであろう。兄弟の身内でありながら、仇討ちの計画に与しなかった京の小次

郎、三浦の余一は、それぞれ、災禍による頓死、失墜による高野出家と、その末路を紹介されているが、そこに兄弟の祟りが介在したかどうかは、物語の叙述からは、必ずしも明らかでない。また筑紫の仲太の件にしても、「とて」といったあたりの口吻からは、五郎の祟りが、語り手の強い主張として伝わってこないうらみがあるし、それをさておいても、物語の本筋に位置付けられるものではない。

つまり、真名本において、兄弟の御霊の祟りが述べられているとしても、それは物語の主流に位置付けるべきものではないと思われる。ここには、菅公の例にみられたような憤怒の激しさと壮大な拡がりはみるべくもない。この物語が、兄弟の御霊の物語であるにしても、少なくとも、その祟り及び祟りへの怖れを述べることを主眼としていないことだけは確かであろう。その意味で、真名本『曾我物語』は、通常いわれるところの〈御霊の物語〉ではない。そして、このことは、真名本の本質と深く関わる問題と思われる。

真名本が直接御霊について述べるのは、次の箇所である。

- (1) 敵を我らが手に懸けずは、我らが身をも我らが命をも敵のため捨ててこそ、悪霊・死霊とも成て御霊の宮とも崇められぬ⁰⁴（巻六）
- (2) されば、この山は仙人所住の山なれば、その麓において命を捨つるものならば、などか我らも仙人の眷属と成て、修羅閻魔の苦患をば免れざらむ。多くの余業この世に残りたりとも、仙人値遇の結縁に依て富士の郡の御霊神とならざらむ（巻七）。
- (3) これは曾我十郎殿と五郎殿と富士の郡六十六郡の内の御霊神とならせ給ひて候間、富士浅間の大菩薩の客人の宮と崇め奉る御神

（巻十）。

(1)は、頼朝による富士野の狩りの計画を聞きいた時、五郎が十郎に述べる言葉の一部。(2)は富士野の狩り場に向う兄弟を描く場面で、富士山にまつわる赫屋姫伝説を引きつつ、五郎が仙人(赫屋姫)との結縁によって、富士の郡の御霊神となろうと述べるところ。この赫屋姫伝説は、『神道集』『富士浅間大菩薩事』や古今序註諸書等、諸種の文献に見られるものである。

たとえば、富士浅間大菩薩と現われたのは、赫屋姫と姫との別れを悲しんで富士山頂に投身した国司であり、従って、この大菩薩は男女二体であるというのが、『神道集』の主張であり、真名本も述べるところである。『神道集』に描かれる神々の多くが、登場人物たちの深刻な受苦の末の転生の姿であるとすれば、この説話においても、男女、とりわけ国司の相手への激しい悲嘆、執心こそが、転生への一つの基本的な要件になるであろう。真名本の中に、「人界における憂悲苦悩の体験こそ済度方便の契機であるという本地物の構成理念」を読み取られたのは、村上學氏であつたが、これは真名本の根幹に触れる指摘と思われる。

(2)の引用文において、注意したいのは、富士山麓において屍を曝すことによって仙人(山神)と結縁できると述べている点である。つまり、死ぬことによって在地の神の眷属となり、多くの罪業にもかかわらず、地獄の苦しみから免れることができると述べているのである。そして、

また、我らが本意なれば、もとより報恩の合戦、謝徳の闘争なれば、山神もなか納受なかるべき。

と、これから引き起こす闘争沙汰が、報恩・謝徳のためという正当性

を持つゆえに、神の承認を得ることができるのだと述べる。そして、さらに、

富士浅間の大菩薩は本地千手観音にて在せば、六観音の中には地獄の道を官り給ふ仏なれば、我らまでも結縁の衆生なれば、などか一百三十六の地獄の苦患をば救ひ給はざらん。

という。すなわち、富士浅間大菩薩の本地である千手観音は地獄を司る仏であるゆえに、これに結縁した自分たちは、地獄の責め苦から救われるというのである。

この文脈において明らかなのは、五郎が繰り返し「地獄の苦患」からの救済を求めているという点であり、その唯一の手段が、富士の山麓に屍を曝すことによって、富士の山神と結縁し、御霊の神となるということであつた。そして、(3)の引用文は、五郎の望み通りに、兄弟が富士浅間大菩薩と結縁し、富士六十六郡の御霊神となったことを示すものである。

ここで、この物語の兄弟が一貫して、死を望んでいることを確認しておこう。

(a) いかならん野の末山の奥にてもあれ、親の敵助経をかくの如く差し合て射執つつ、後に左も右もならましや(巻四)。

(b) 富士の山の麓において、我らが屍を曝して名を後代に留めむ事こそ、同じ死ながらも今生の思ひ出、冥途の訴へなれ(巻七)。

(c) かかる目出たき明山の麓において屍を曝し、つ、命をば富士浅間の大菩薩に奉り、名をば後代に留めて(巻七)

(d) 名を後代に留め屍をば將軍の陣内に曝してこそ年来日来の本意にては候へ(巻九)。

(e)舎兄の十郎助成と朝夕、一所にて屍を曝さむと契り候ひしに（巻九）

(f)朝夕、一所にて屍を曝すべしと契り候ひしに、しばしなれども後れ先立ち候こそ口惜しう候へ（巻九）。

右の例のいずれも、彼等の仇討ちが自らの死と一体となっていることを物語っている。そして、箱根越の途次、鞠児河を渡るとて、五郎が、

未だ知し食さずや。罪人の渡る河は濁るなり。死出の山・三途の大河と云ふ事ありとて、我らが思ふには、鞠児河こそ三途の大河、箱根の山こそ死出の大山よ。鎌倉殿こそ閻魔王よ。親の敵に合はむ処こそ閻魔の庁よ（巻七）。

と語るように、兄弟は死へと突き進んでゆく。つまり、仇討ちの結果の一可能性として彼等の死があるのではなく、死はむしろ仇討ちという行為の前提となっている。(c)に見られるように、彼等は、「命をば富士浅間の大菩薩に奉」ることによって、富士山麓の御霊神となることを望んでいるのである。

この物語において、たとえば、宮藤助経の配下、大見小藤太・八幡三郎が、河津の父伊藤助親の襲撃を受けた際の心情を「命をば一郎殿（助経）に奉り、名をば後代に留めむ」（巻二）と述べ、また、伊出の屋形での仇討ちの場で、十郎に相対する新田四郎の心情を「命は君に奉り、屍をば駿河の国富士野の裾、伊出の屋形に曝しつつ、名をば後代に留めむべし」（巻九）と述べるのに代表されるように、一般に武士は、自らの主君のために命を捨てる。

それに対して、五郎は命を富士浅間の大菩薩に捧げるといふ。彼等

に命を捧げるべき主君は存在しない。物語の中で、兄弟の自己規定の言葉として、繰り返し登場する「貧道無縁」という語は、彼等のこの世（頼朝によって統御された東国武士社会）における、無意味さを物語っている。つまり、彼等は生きながら、もはや存在していないのである。彼等は、この社会を突き抜けて、その向こう側（神々の世界）に自らの居場所を求めざるを得ない。このように見えてくると、同じく御霊神といひながら、真名本の兄弟について、本節冒頭で瞥見した、菅原道真のような激しい憤怒と世界の破壊が語られることはない。むしろ彼等は、ひたすら自らの罪業を意識し、その報いとしての「地獄の苦患」を恐れている。

このことは、同じ『曾我物語』の中でも、仮名本との比較にはつきりと表れている。仮名本⁽¹⁾では、真名本(1)の当該箇所を「もしし損ずるものならば、悪霊・死霊となりて、命をうばふべし」（巻五）とし、富士野の狩り場では、助経の狙撃に失敗した五郎が、「自害して、悪霊死霊にもなりて、本意をとげん」と述べる。また、巻十においては、五郎が斬首の執行者、伊豆二郎に対して「あしくきり給ひ候はば、悪霊となりて、七代までとるべし」と述べている。そして、兄弟の死後、その「瞋恚執心」が、仇討ちの現場を通りかかった人々を、死もしくは狂気に至らしめるという事件が統発したため、頼朝が遊行上人の勧めによって、勝名荒人宮として兄弟を神と祀ったとする。

このように、仮名本の叙述においては、兄弟の祟り神としての性格がより明瞭であり、上人が昔の例しとして、菅原道真以下の霊を挙げていることも、それを示している。真名本では、兄弟のこのような祟りは明瞭に語られず、その御霊神にしても、後日、伊出の屋形跡を訪

れた大磯の虎の前に、社が忽然と現われるというような叙述となっている。真名本の叙述に従えば、彼等は生前の望みを達成したことになる。

仇討ちの後、頼朝の尋問に対して、五郎が、

ただ本意を遂げ候ひぬる上は、一寸の首を千段に召され候ふとも、全く恨とも存ずまじく候ふなり（巻九）。

と述べているように、富士野の狩り場において仇討ちを決行し、屍を曝すことが目的であった以上、その宿願は完遂されたわけである。彼等によって激しい憤怒が発せられる余地はないと思われる。にもかかわらず、彼等が御霊の神と祀られるに至ったのは、むしろその内面の深い苦悩ゆえであり、その結果として、彼等自身も「地獄の苦患」から救われることになる。そして、遺族に宛てた遺書の中で、兄弟がそれぞれに、

たとひ、生命こそ替り候ふとも叢魂の影にて守護神となり奉るべし（巻九）。

と誓っているように、在地の神としてより根源的な世界へと回帰を果たそうとしている。つまり、彼等の発想の原点は、自らの死であり、自らの命を放棄することにより、彼等は救済されたと真名本は語っている。

A へ父の敵を討たぬ者は親不孝であり、地獄に堕ちる。〳

B へ人を殺傷することは罪であり、それを犯した者は地獄に堕ちる。〳

この二律背反的状况を彼等が自覚する限りにおいて、彼等の墮地獄は自明のこととなり、彼等は、そこを起点として自らの救済を求めざ

るを得ない。真名本『曾我物語』が、『神道集』とその思想的基盤を共有しながらも、それと決定的に相違するのは、真名本がこの罪業の問題を核心において抱え込んでいる点である。

かくして真名本は、彼等兄弟の罪業の物語であり、内面の物語ということになる。そして、ここに真名本のきわめて特殊な性格が露呈していると思われる。

二 罪業の物語

親父讎敵の首を取て亡父戦苦の身代に立て替へ、黄泉中有の闘諍を助けて快樂菩提の彼岸に至らしめん（巻四）。

これは、五郎の箱根権現への祈願の一部である。弓矢による狙撃によって落命した兄弟の父河津三郎の霊は、黄泉中有をさまよい、安んじることがない。その父の身代わりとして、仇宮藤助経の首を捧げることにより父の成仏を計ろうというのである。

慈光本『承久記』には、院方に与して敗れた甲斐宰相中将範茂が、処刑に際して、「剣刀の先にかゝりて死する者は、修羅道に落るなれば」といって、柴漬にされたという一節が見られるが、敵の狙撃によって果てた河津三郎も、これとほぼ同じ論理によって、修羅道をさまよっていると観ぜられたのである。その父の霊を救うためには、敵を身代わりとして修羅道に送り込む他はない。その意味で、この仇討ちは、まさしく父のための行為であり、真名本の副題にいう「報恩合戦謝徳闘諍」であった。

さて、仇討ちという行為の意味については、神前を血で汚した罪

を、敵の血を流すことによって贖うという折口信夫氏⁽¹⁹⁾の供儀説が知られるところであるが、これに対して、勝俣鎮夫氏は、殺された死者の怨恨を慰められないときは死霊の祟りがあるという、死霊に対する恐怖感に発するものとし、復讐義務者がその義務を果たさないかぎり、霊がこの世にとどまって、生存者を責め苛むという考え方が基底にあるとされた。

この点に関連して、『吾妻鏡』が記す、頼朝による五郎訥問の場面を引用してみる。

五郎申して云はく、祐経を討つ事、父の尸骸の恥を雪がんとために、つひに身の鬱憤の志を露はしをはんぬ。祐成九歳、時致七歳の年より以降、しきりに会稽の存念を挿み、片時も忘るることなし。しかうしてつひにこれを果たす。次に午前に参るの条は、また祐経御寵物たるのみにあらず、祖父入道、御気色を蒙りをはんぬ。彼といひ此といひ、恨みなきにあらざる間、拜謁を遂げて、自殺せんがためなりてへれば、聞く者舌を鳴らさずといふことなし(建久四年五月二十九日条⁽²¹⁾)。

五郎は、ここで「父の尸骸の恥を雪がんとため」と述べている。工藤祐経によって殺害された兄弟の父河津三郎は、その身体に受けた恥辱のため、いまだ尸骸のままに、この世に留まっていると観念されたと思われる。この時代における尸骸観については、真名本において、頻出する「屍を曝す」という表現と関連して注目される必要があるであろう。

「父の尸骸の恥を雪がんとため」云々という『吾妻鏡』の叙述は、尸骸が半ば生きてあることを示しており、尸骸自体が一定の力を保持して

いることの表れとみてよい。その意味で、傍線部「拜謁を遂げて、自殺せんがためなり」という五郎の発言も、頼朝に対する強い示威とみてよいであろう。

しかし、問題を複雑にしているのは、真名本の復讐譚には、こうした仇討ち観の上に、仏教唱導的な教義が被せられていることである。つまり、物語の冒頭近くにおいて、

曾我十郎助成・同五郎時宗兄弟二人ばかりこそ、將軍家の陣内を憚らず、親の敵を討て、芸を当庭に施し名を後代に留めけれ(巻一)。

とするように、基本的にはその武勇即「報恩合戦謝徳闘諍」を称揚する意図を露にしながらも、それだけでは割り切れない問題を残している。福田晃氏⁽²²⁾が指摘されるように、一見仏教唱導的響きを持つ「報恩合戦謝徳闘諍」という語によって宣揚されるこの行為が果たして仏教的精神に基づくものであるかどうかは、いまのところ疑問である。

というのも、真名本では仇討ちを「罪業」とする観念が、兄弟の母や、巻六に登場する宇都宮の女房によって語られているからである。たとえば、兄弟の仇討ちへの志を知った母は、夫の死の直後、悲しみの余り、自ら、子供たちに仇討ちを命じた前非を

「由なき事を思ひけり。罪の上になほ罪を重ねて罪業深き人となさんと思ふ事の悲しさよ」と、今はその義も忘れたり(巻五)。

と悔いて、兄弟を諫めている。つまり、ここでは、仇討ちが罪の上に罪を重ねる行為であり、それが、亡夫が背負った罪を一層深めることになると言っている。母は前述の五郎の祈願とは正反対のことを述べているわけである。この物語の難解さがここに集約されているといっ

てもよい。

なお、この点に関連して、村上學^四氏は、物語終盤の五郎訊問の場面における「善の繩」に注目され、この語が常識的には罪業と考えられる兄弟の仇討ち行為を「報恩合戦謝徳闡靜」へと逆転させるキーワードであるとされた。卓説であるが、その「善の繩」が担う象徴的意味がどのような論理をもとに成立しうるかという点において、問題は依然として残るものと思われる。

物語において「報恩合戦謝徳闡靜」と称揚される兄弟の仇討ちは、一面、兄弟を死後修羅闡靜の世界へと追い遣るものであった。そのことを自身も認識するがゆえに、彼等は富士浅間の神と結縁することにより、その責め苦から逃れようとした。それでは、そこまでして彼等を仇討ちに駆り立てたものは何であつたらうか。それは、彼等の内面の物語であつた。そして、如上の罪業観と深く関わる地点において、兄弟の内面が追求されたところに、真名本『曾我物語』の独自性および文学史的意義があつたと思われる。

真名本の、仇討ちへの過程において、鮮明に浮き彫りにされているのは、仇討ちに向かって噴出する兄弟の鬱々たる情念であり、彼等の内面である。

(1) 命を生きて朝夕思ひ居たるも、痛く罪深し。只一筋に思ひ切り給へ（巻六）。

(2) されば明けても暮れても物思ひたる気色も理かな（巻七）。

(3) なかんづくに思ひの深き者を尋ぬるには、助成・時宗にて留めたり。男子に縁なき人を尋ぬるには、曾我の女房にて留めたり（巻十）。

兄弟は、このようにしばしば「思ひの深き者」として語られている。そして、(1)の文が示すように、この「思ひの深き」状態が、「罪深」いことに注目しておこう。兄弟の罪即「冤屈」は、仇を持ていという意識の内側にすでに発生している。この思い深き状態は、換言すれば、真名本の語り手が十郎の心境を「五月雨連いて心の闇、晴れ遣らず」と叙すように、心の暗黒に他ならない。そして、この十郎の「心の闇」は、その討ち死という帰結によって、

五つの年より泣き悲しみし心の闇は今こそ了死とはなりにけれ
(巻九)。

と、はじめて解消されるのである。つまり、十郎は死ぬことによってのみ救済されることを「五つの年より」運命づけられていたのである。

兄弟の母は、夫の死の直後、悲嘆のあまり、五歳と三歳の我が子に「未だ二十にならざらむその前に、助経が首を取て我に見せよ」（巻二）と命ずる。これに対し、兄の一万（十郎）は「いつか責めて十五になりつつ親の敵助経を狙ひてみむ」と仇討ちへの決意を述べており、十郎の「心の闇」はこの時に発したことになる。母の罪は重い。

次に、兄弟が九歳と七歳の時、二人は天翔ける五羽の雁の群れを見つけ、物言わぬ鳥さえ家族が揃っているのに、自分たちには父がいなことを嘆く。そして、もし父が存命ならば、他の子供と同じように馬鞍をも与えられて弓射に興ずることができたはずだと、今は亡き父を恋し慕う（巻四）。

そして、さらに箱根山の稚児となつた箱王（五郎）の傷心が語られる。すなわち、年も暮れになり、同宿の稚児たちのもとには、正月の

晴れ着に取り添えて、両親からの文が多数届けられた。ところが、宮王のもとには、同じく晴れ着に、母の文ばかりであった。箱王は、次のように言う。

人は皆、文だにも父の文、母の文とて取り集めて読み合うたに、この三箇年が間この御山にありつるに、常には母の御文ばかりを見て、父の御文とて未だその手跡を見ぬこそ口惜しけれ。これに付けても敵の助経こそ恨めしけれ。(略) いづれの文よりも恨めしきは父の御文なり(巻四)。

両親からの手紙を互いに読み合つて、はしゃいでいる稚児たちの輪に箱王は入っていくことができない。彼には父からの手紙がないからだ。この疎外感、欠脱の意識こそが敵助経への「恨」をかきたてる。その意味で、箱王の仇討ちへの指向は、根源的なものに根ざしている。

これら一連の挿話を軽視してはならないだろう。これらは、兄弟の仇討ちへの意志が、単に父への「報恩謝徳」の念にのみ発するではなく、内面的な心の傷に根ざしていることを表現しているからである。そして、このことはまた、遺族への遺書に十郎が

五郎と助成は生年五つや三つの年よりは、孤子と成て母御前一人を憑み進せつつ年月を送りし事の悲しさに、仏神三宝に祈り白して敵助経に合わせ給へと祈念(巻九)

とし、五郎もまた同様のことを記していることから確かめ得るであろう。

さて、彼等の「心の闇」は、他ならぬ彼等自身によってどの程度自覚されているであろうか。五郎は頼朝の供として箱根権現を訪れた助

経の命を狙うが、果たさない。しかし、それ以来、五郎の心から助経の像が去るときは片時もなくなってしまう。

こはいかがすべき。明けても暮れても只助経が事のみ思ひ居たり。何とかせん。たとひ法師に成りたりとも学文勤行の折節もこの事を思ひ出して、哀れ、男に成りて十郎殿と列れ奉りて敵を討つべきものを、心憂き事かなと思へば、却て罪業ともなりぬべし。只一向に思ひ切て本意を遂ぐべし(巻四)。

五郎はもはや自分の心が制御できなくなっている。そして、仏前に仕えながらも、敵のことを忘れることができない状況を「罪業」だとしている。この文脈は、五郎の十郎への言葉において再び繰り返される。

一年、鎌倉殿御二所詣の時、敵の左衛門尉助経を一目見しより以来、片時もその面影忘れず候ひき。経を読み行法を営めどもその面影をだにも思へば心も空に歩浮れて、善心も更に身に副はず。(略) それに付けても父の御跡のみ恋しくて、たとひ法師に成て候ふともこの悪念怠り候ふまじければ、なかなか却て父のために我が身のためにも罪業となりぬべしと覚え候ふなり(巻四)。

仇討ちの志を「悪念」といつている点に気をつけたい。この悪念のため五郎は、「心も空に歩浮れて」いるのである。そして、この悪念にとりつかれてしまった以上、仇討ちをやめるわけにはいかない。悪念が彼をして仇討ちへと走らせるのである。

(a)もし敵助経が軀を見せしめ給ふまじくはただ今御宝前において忽に命を召せ(巻四)

(b)もしまた成就すまじくは、我らが年来の念願は御拝殿において怨

鞠に挙げ、二人ながら御殿を出ざるその先に蹴殺し給へ（巻七）。
(c)もしこの思ひ叶はずんば、御前にて我ら二人を怨鞠に挙げて、蹴殺し給へ（巻七）。

(a)(b)は、箱根権現、(c)は三島明神への祈願の一部である。願いを聞き届けてくれないぐらいならば、神前において命を召せというのである。五郎のこの激しい情念の噴出は、その反面、彼の罪業の深さを物語っている。そして、そのことは彼自身、十分に自覚しながらも、もはや如何ともしがたい。この苦から逃れるためには、彼が彼であることを止める以外にない。

ここで問題にされているのは、自身の力では如何ともしがたい兄弟のこうした心の内側であり、彼等の罪はその内部に発するものということになる。

結びにかえて

兄弟が富士山麓に屍を曝さんと繰り返すのは、自ら屍となって、ながくこの地に留まることにより、富士の在地神たる富士浅間大菩薩との結縁を果たすためであった。「貧道無縁」の彼等が救済される方法は他にないと観ぜられたからである。彼等にとって、生きてあることがすでに罪業の証しであり、仇討ちを遂行しようと、或いはそれを回避しようと、いずれにしても墮地獄への道を免れることは不可能である。

兄弟をこうした抜き差しならぬ状況にあるものと設定し、彼等自身に自らの罪と苦悩を語らせた点に、真名本の特殊な世界を読み取るこ

とは可能であろう。つまり、罪業観を基軸として、主人公の内面を深く照射し得たところに、この物語の一つの意義があるように思われる。

彼等の深い苦悩が、その屍を媒体として、彼等を神々の世界へと誘う。それは、前述したように、『神道集』に代表される中世本地物の構造に通底する性格ではあったが、これほどに、主人公の内部が、その罪意識の表出の物語として、緻密に語られることはなかったのではないかと思われる。

彼等は生前の望み通り、富士六十六郡の御霊神として転生を果たした。しかし、そのことによって、彼等の苦悩がすべて解消されたわけではない。御霊の社を訪れた大磯の虎の歌詠に対して、十郎の霊は虎に対する思いを詠み返している。神々もまた思い悩むのである。

注

- (1) 柳田国男「曾我兄弟の墳墓」（『定本柳田国男集』5巻）「老女化石譚」（同9巻）
- (2) 折口信夫「国文学の発生（第四稿）」（『折口信夫全集』第1巻）
- (3) 筑土鈴寛「歴史と伝説」（『筑土鈴寛著作集』第四巻所収）
- (4) 角川源義「語り物文芸の発生」、「妙本寺本曾我物語攷」（『妙本寺本曾我物語』所収）
- (5) 塚崎進「物語の誕生」、「曾我物語并ニ曾我物の研究」
- (6) 大島建彦、日本古典文学大系『曾我物語』解説等
- (7) 福田晃「曾我語りの発生」上・中・下（『立命館文学』昭47・12、昭48・3、昭51・8）、「曾我物語覚書―その成立時期をめぐって―」（『立命館文学』昭54・3）、「真名本曾我物語」2解説、「曾我語り」の世界」上・下（『文学』平1・5、同1・6）等

- (8) 柳田国男「人を神として祀る風習」〔『定本柳田国男集』10巻〕
- (9) 群書類従第二輯所収
- (10) 『北野創建縁起』
- (11) 『扶桑略記』所引「道賢上人冥途記」
- (12) 堀一郎『日本のシャーマニズム』
- (13) 堀一郎『我が国民間信仰史の研究二』七四一頁
- (14) 以下『真名本曾我物語』の引用は、平凡社東洋文庫版により、一部表記を改めた。
- (15) 片桐洋一『中世古今集注釈書解題二』
- (16) 村上学『曾我物語の基礎的研究』一二二四頁
- (17) 岩波日本古典文学大系『曾我物語』による。
- (18) 引用は現代思潮社版による。
- (19) 折口信夫「仇討ちのふおくらあ」〔全集十五巻〕
- (20) 勝俣鎮夫「日本人の死骸観念」〔木村尚三郎編『生と死』Ⅱ〕
- (21) 引用は、貴志正造氏の『全譯吾妻鏡』による。
- (22) 福田晃「曾我物語・義経記の思想」〔日本文学協会編『日本文学講座』4〕
- (23) 村上学『曾我物語の基礎的研究』一二一五頁